

Hey Hey! this is what Tigh Mhichil said about me. Wasn't that nice of them? – If you figure out what it means will you please let me know

ルカーンはシェーマス（フルート）の息子だ、確か。

彼のアルバムは2007年に出た中で最も興味深いアルバムと言えるかもしれない。

- Lorcán Mac Mathúna: 《Rógaire Dubh》 (Lorcan Mac Mathuna 689232010607, 2007)

ベースは明らかにマンスターのシャン・ノース伝統だ。しかし、そこに非常に品の良い、独創的な伴奏がつく。これまで誰も試みたことがないようなアレンジの。

その伴奏を担当する演奏に耳を奪われる。例えば、クィヴィーン・オライリ
のハルデンガー（フィドル）。ミック・オブライエンのパイプス。ジェーン・ヒューズのチェロ。時として北欧の音楽を聴いているのか、クラシックを聴いているのか、どこの音楽を聴いているのか、判らなくなるが、歌は確かにシャン・ノースだ。

これほど歌に対する愛情が溢れ、しかも編曲の創意工夫も優れたシャン・ノース系のアルバムは初めて聴いたような気がする。ともかく、気になる曲が多く、何度も何度も聴いてしまう。見方によってはイアルラ・オリナールドに似ているという人がいてもおかしくないが、ロルカーンはもっと泥臭い。というか、オーニー・マイキー・オスーラヴォーンにも通ずる、ある種の濁り味がある。しかし、編曲のセンスはイアルラより、もっと典雅だ。現代的な方向に行くのではなく、もっと違う何かだ。不思議な音楽である。いずれにせよ、これらの人に共通する土地、クーレーはアイルランド音楽の特殊な磁場と思える。

ロルカーン・マクマフーナは1976年、コークの生まれ。[MySpace のロルカーンの頁](#)がある。4曲試聴できるが、ぜひ、<An Clár Bog Déal>を聴いてみてほしい。あるいは、[CD Baby のロルカーンの頁](#)もあるが、ぜひ、<Cath Chéim an Fhia> またはタイトル曲 <An Rógaire Dubh>に耳を傾けてみていただきたい。

ただ、一言お断りしておきたい。これらの試聴音源はやはり試聴音源でしかない。CD版は、うっとりするほど良い音であり、差は歴然である。実は、このCDを買ったきっかけは、クレーア県はエニスのカスティーズの音質抜群の試聴機でCDを聴かせて

もらったからだった。良い音での試聴は重要である。また、シャン・ノース方面で何かないかと訊いてすぐこれを出してくれた店員さんにも感謝とともに脱帽する。あの店は変わったものがいろいろあって面白い。上の階では子供の音楽教室みたいなのもやってたしね。やっぱり、エニスはいランド音楽の首都かもしれない。あの町にしてこの店あり。